「驚きのイジラレ属性っスね」

…フリートーク：ガウェイン

ガウェイン
「〝最強厨〟……
たしかに、不名誉極まる称号です。
私も気をつけなくては……」

…フリートーク：ユリウス1

ユリウス
「サクラ迷宮の既攻略層の調査に出ていた」
「予想されていた事だが、
特に実入りのない癖に、
リスクの大きい仕事だった」
「サーヴァントのいない身には応えるが、
この手の汚れ仕事には慣れている。
おまえが気にする事じゃない」

…フリートーク：ユリウス2

ユリウス
「ラニを解放した後、
休まずに奥へ進み、ＢＢを捕らえろ」
「厳しい戦いになるだろうが、
おまえならやり通せる。
しくじるなよ、岸波」

…フリートーク：凛

遠坂凛
「しっかりね。
ランサーは強力だけど、ま、
貴方ならなんとかするでしょ」
「だって、今までもそうやって
勝ち抜いてきたんだもの。
そこは心配していないわ。ただ……」
「プレッシャーかけるようで悪いけど、
最後の詰めは誤らないで」
「ＢＢ……あのＡＩはここで止めておかないと
取り返しのつかない事になる……
そんな気がするの」

…フリートーク：桜1

間桐桜
「マスター、ＮＰＣの反応は依然、
レリーフ内部に確認できます」
「レリーフ内部は計測不能ですが、
ラニさんとの戦いに勝利しなければ
解放されないのは間違いありません」
「岸波さん、お願いします！」

…フリートーク：桜2

間桐桜
「早くレリーフの前へ。
こちらも深層落下の準備を
進めておきます……！」

6－3－2 校庭 桜

●時間：一 ●場所：校庭

桜……？
生徒会室でこちらのバックアップをしてくれる
筈の彼女が、なぜここにいるのだろう。
……もしかして、
自分を待っていた……とか？

間桐桜
「……すみません。
どうしても疑問があって、
生徒会室を抜け出してきちゃいました」
「……その。
本当に、行くんですか？
今度の衛士は前回とは違います」
「ランサーの能力値は岸波さんの
サーヴァントを超えています。
勝てる可能性は偶然の偏りがあって四割」
「バックアップをすると言っておきながら、
私は、貴方の勝利を信じられない」
「いえ、私にはこの状況でも諦めない、
貴方たちが分かりません」
「……だから、聞かせてください。
岸波白野さん。
貴方はどうして戦うんですか？」

選択肢1
A：理由はわからない
B：みんなのために
C：君が辛そうだから

1－A：理由はわからない

間桐桜
「そう……ですか。
分からないのに、確信はある。
やっぱり、ＡＩには難しいです」

淋しげに桜は笑う。
こちらもつられて苦笑しながらも、頷いた。
理由はわからない。だが、ここで逃げてはいけない。
そんな確信が胸に灯っているからだ。

⬇6－3－3「ラニのレリーフ前」

1－B：みんなのために

間桐桜
「あ、そうですよね。
ここでＢＢを止められなければ、
状況はより悪化します」
「勝てないのに戦う、じゃなくて、
勝てなくても戦うしかない、
だったんですね！」
「良かった、それなら